

テーマ	多様な子どもたちが前向きに深く学ぶ社会科授業
発表者 (所属)	企画者・司会者： 石田航平（関西学院初等部） 話題提供者： 大谷浩介（関西学院初等部） 山根真由美（関西学院初等部） 指定討論者： 高松真也（同志社小学校） 元山一則（神戸海星女子学院マリア幼稚園）
【発表概要】 ≪企画主旨≫ 社会科の教科目標は、「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成する」ことである。 「分断」が進む現代だからこそ、社会科が果たす役割はますます重要になっている。自分と異なる意見や立場の人々と共に、根拠に基づいて対話しながら、よりよい社会を創ろうとする人を育てることは、まさに社会科が目指すところだからである。 社会科の教科目標を実現するためには、学びを単なる知識の習得にとどめず、「深い学び」へと高めていく必要がある。次期学習指導要領においても、資質・能力の構造化を図りながら、子どもたちが主体的に課題を探究し、社会の本質を捉えていく「深い学び」の実現が強く求められている。単なる事実的知識の暗記に終始するのではなく、それらを相互に関連付けた「概念的知識」へと高め、子どもたちが「社会的な見方・考え方」を働かせながら多角的に考え、根拠に基づいて公正に判断する力を育てていかなければならない。つまり、「知識の統合的な理解」と「思考・判断・表現の総合的な発揮」という高次の資質・能力の育成が求められているのである。 しかし現実には、社会科は子どもたちにとって必ずしも魅力的な教科になり切れていない。ベネッセ教育総合研究所の「第5回学習基本調査」によると、小学生の「好きな教科」において、社会科は10教科中最下位（55.6%）という結果であった。さらに、社会科は多角的な話し合いや文章資料、地図、統計、図表など多様な情報を扱う教科である。そのため、ASD、ADHD、LDなどの特性をもつ子どもたちにとっては、学習上の困難さを感じやすい場面も少なくない。だからこそ、授業UDの視点は社会科において特に重要であると考えらる。 大谷先生、山根先生の実践は、そのような課題に対する一つの示唆を与えてくれるものである。多様な子どもたちが楽しく社会的な見方・考え方を働かせながら、「わかる・できる・探究する」ことのできる授業とはどのようなものか。そのヒントを、皆さんと共に考えていきたい。	

《話題提供》 関西学院初等部 大谷浩介

多様な子どもたちが問いを連続させていく社会科授業の単元デザイン

社会科では目標である「公民的資質・能力」の獲得のため、深い学びを積み重ねていく。そのためには子どもたちが教材を主体的に捉え、自分事として学びを進めていくことが必要であり、同時に社会科の本質から外れないことを大切にしたい。一方で日本を取り巻く社会事象は非常に複雑であり、児童の中には社会というものをどこか他人事のように感じ、その学びに苦手意識を持つ子もいる。本実践では、そんな多様な子どもたちが教材を自分事として捉えながら本質に迫っていくための単元デザインを中心にお話したい。

本単元では水道水を通じて「公共の価値」に迫る。ホンモノに触れる体験を通して子どもたちと共に妥当性のある学習課題を設定する。子どもの予想が問いとなり、思考を続ける中で新たに問いが生まれる「問いの連続性」を意識する。そのうえで焦点化されたゴールに向かう。大枠としての単元デザインが本質的であり、子どもにとって妥当性のあるものであれば、苦手意識を持つ児童も共に学びを深めていくことができる。

子どもたちが自ら問いを見出し続け、いかに主体的に学ぼうとしたのか、皆さんと考えていきたい。

《話題提供》 関西学院初等部 山根真由美

「その子らしい」社会的見方・考え方が活きる社会科授業づくり

学級には様々な感性をもつ子がいる。その子たちが社会科と向き合ったとき、どのような姿を見せるのか。学んだことを生かし、前のめりになる子もいるが、そうでない子も多くいる。「覚えたり考えたりするのは苦手」と学びに拒絶反応を示す子、社会科は好きだが深い思考が苦手な子、視野は広いがこだわりが強く他の意見を受け付けない子…。多様な子どもたちが「その子らしい」意見をもって、「思考→判断→表現→再思考」のサイクルを回し、「多角的・多面的な見方・考え方」を育む授業とは。

本話題提供では、小学5年生の小単元「水産業のさかんな地域」における、広島県江田島市のかき養殖を事例とした授業実践を紹介する。本学級の子どもたちにとって江田島は、平和学習で訪れ、民泊を通じて島の人々と温かい繋がりを結んだ特別な場所である。この「縁のある土地」を教材とすることで、単なる教科書の中にある客観的事実をなぞるのではなく、産業に携わる人々の思いに寄り添う「当事者」としての探究が可能になる。さらに、本実践では価値判断場面に重きを置くことで、課題をより自分事として捉えられるようにした。生産者・住民・観光客といった「異なる立場」の利害や願い。経済面、社

会面、環境面。どの立場に立ち、何を重視して見るのか。そこでは、その子の文脈で生まれた「その子らしい」多様な考えが表れる。つまりは、多様な子どもたちがより輝き磨き合う場が生まれるということである。

「多様な子どもたちが、多角的・多面的な見方・考え方を働かせ、輝く」ことは、「深い学び」への導きとなり、この「深い学び」を積み重ねることが、公民的な資質能力の育成に結びつくと考えている。